（12 月　30 日）「詩編 149 編」

踊りをささげて御名を賛美し　太鼓や竪琴を奏でてほめ歌をうたえ。

（詩編 149 編 3 節）

・「踊りと剣で主をたたえよ」：ハレルヤ詩編です。この詩編は、勝利を祝う神殿での宗教的踊りに合わせてつくられたと考えられています。太鼓や竪琴を用いて、にぎやかに踊ったのでしょう。

・6 節に、「両刃の剣」という言葉があります。両側に刃がある剣のことですが、これは戦いに非常に役立つ一方で、使い方を間違えると自分が傷つく恐れのある武器です。たとえとしても用いられる言葉です。

・イエス様はゲツセマネの園で逮捕されようとしたとき、兵士たちに歯向かおうとする弟子たちに対して、「剣をさやにおさめなさい」と命じられました。わたしたちに必要なのは人を傷つける剣ではなく、霊の剣と賛美の言葉なのです。

（12 月　31 日）「詩編 150 編」

息あるものはこぞって　主を賛美せよ。ハレルヤ。

（詩編 150 編 6 節）

・「全楽器に合わせた結びの栄唱」：ハレルヤ詩編です。ついに詩編 150 編、終わりました！みなさん、ついてきていますか？みんなでマラソンを走っていたのにいつの間にか一人だった。こんなに悲しいことはないですよ。

・全詩編の結びは、詩編の基本的主題を明確にします。それは「神を賛美せよ」ということです。この言葉が 10 回繰り返され、わたしたちはいつも神さまに感謝と賛美をささげるのだという思いになるのです。

・最後に聖歌 11 番を歌って終わりましょう。「すべてはうるわし　神をほめよ　平和の主なる　神をほめよ　いずこに行くとも　われらを導く　光のもとなる　神をほめよ」。新しい年も、神さまを賛美して歩んでいきましょう。

2025 年 12 月

詩　編　　通　読

（12 月　1 日）「詩編 135：15～21」

偶像を造り、それに依り頼む者は　皆、偶像と同じようになる。

（詩編 135 編 18 節）

・レビ記 26 章 1 節に、このようにあります。「あなたたちは偶像を造ってはならない。彫像、石柱、あるいは石像を国内に建てて、それを拝んではならない」。これは出エジプト記 20 章にあるモーセが神さまから受け取った十戒の一つです。

・古代から多くの世界の宗教は、神々の像を刻んでそれを拝んできました。大仏などの仏像やお地蔵さんなどもそれに当たるかも知れません。確かに目の前に拝む対象があった方が、祈りやすいのも事実です。

・しかし聖書は、偶像を否定します。「偶像」を祈りの対象とし、その「偶像」を神聖化することに対して、警鐘を鳴らすのです。ただ、だからといって、「偶像」と思えるものを全部廃棄してしまうのは、やりすぎのようにも思いますが。

（12 月　2 日）「詩編 136：1～9」
ただひとり　驚くべき大きな御業を行う方に感謝せよ。慈しみはとこしえに。
（詩編 136 編 4 節）

・「主の慈しみは永遠」：賛歌です。1 節にある「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに」という言葉は、礼拝定式でした。イスラエルの人たちはことあるごとに、この詩編を唱えていたと思われます。
・「神の中の神」、「主の中の主」という言葉があります。キリスト教（ユダヤ教）は一神教だと言われます。しかし聖書を読んでいると、「異教の神々」という言い方も見られます。わたしたちにとってはただ一人のお方、という意味で捉えるべきなのでしょう。
・そして 9 節まで、「創造主」である神さまに対する感謝が続きます。自然の中に身を置いたときに、その見事さに圧倒されることがあります。そのときにこそ、神さまのみ業を思い起こしたいものです。

（12 月　3 日）「詩編 136：10～16」
イスラエルの民に荒れ野を行かせた方に感謝せよ。慈しみはとこしえに。
（詩編 136 編 16 節）

・10～16 節には。出エジプトの出来事が書かれます。この詩編は共同体や家庭の中で、幾度となく唱えられてきました。その中で神さまがイスラエルの人々を救い出した出来事を、繰り返し想起していたのでしょう。
・昨日の 1 節には、「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに」という言葉がありました。その箇所や 118 編 1 節を用いて、聖歌 567 番ができました。「歌え主に感謝　恵み深い主に　歌え主に感謝　アレルヤ」という、テゼ共同体で用いられている歌です。
・わたしたちは聖餐式の中で、「感謝と賛美はわたしたちの務めです」と唱えます。ふとしたときに、この聖歌の言葉が鼻歌で出てくるようになればいいですね。ちなみにアレルヤとは、ハレルヤ（ヘブライ語）のラテン語での言い方です。

（12 月 28 日）「詩編 148：1～6」
御使いらよ、こぞって　主を賛美せよ。主の万軍よ、こぞって　主を賛美せよ。
（詩編 148 編 2 節）

・「全被造物への賛美の呼びかけ」：ハレルヤ詩編です。年末の風物詩として、ベートーヴェンの第九が演奏されることがあります。その第 4 楽章は「歓喜の歌」とも呼ばれ、合唱されることも多くあります。
・聖歌集の 320 番は題名が「HYMN TO JOY」です。HYMN とは賛美のことですので、「喜びの賛美」という意味です、そしてこの聖歌の曲は、ベートーヴェンの第九、第 4 楽章が用いられています。
・「あめ(天)もみ使いも　神をたたえよ　日も月も星も　喜び歌え　愛なるみ神は　あめつち(天地)つくり　変わらぬのり(法)もて　治めたまえり」。この一年の感謝を、一緒に賛美いたしましょう。

（12 月 29 日）「詩編 148：7～14」
主の御名を賛美せよ。主の御名はひとり高く　威光は天地に満ちている。
（詩編 148 編 13 節）

・この詩編 148 編の前半では、天にあるものに「賛美せよ」と呼びかけます。古来多くの宗教では、太陽や月も信仰の対象でした。しかし聖書においては、太陽も月も被造物の一つにすぎません。だから主を賛美するのです。
・そして今日の後半部分は、「地において」とはじまります。竜や獣だけでなく、深淵、火、雹、雪、霧、嵐、山々、丘、木、林に至るまで、「主を賛美せよ」と命じます。日本には八百万の神々という考えがありますが、聖書ではすべて神さまが作られたものなのです。
・そしてわたしたち人間に対しても、主を賛美せよと命じます。わたしたちもまた、神さまによってつくられ、そして神さまの慈しみによって生かされている一人一人です。そのことを思うときに、賛美せずにはいられないのです。

（12 月　26 日）「詩編 147：10～14」
あなたの国境に平和を置き　あなたを最良の麦に飽かせてくださる。
（詩編 147 編 14 節）

・現在の日本の国境は、すべて海の上です。陸続きで他の国に行くことはできません。小さいころ歩いて国境をまたぐ外国の人をうらやましいと思ったことがあります。しかし戦争が起こると、そう言ってもおられません。
・「国境に平和を置く」ということは、中東の人々の大きな願いなのでしょう。ただその平和というのが、攻め込む敵の力を奪い弱らせるということであれば、何か違うようにも思います。
・その国境で違う民族の人たちが出会い、語り合い、食卓を囲む。それが本当の平和ではないでしょうか。相手が大切にしているものを尊重し、共に歩んでいく。「主の平和」とは、そのようなことではないでしょうか。

（12 月　27 日）「詩編 147：15～20」
どの国に対しても　このように計らわれたことはない。彼らは主の裁きを知りえない。ハレルヤ。
（詩編 147 編 20 節）

・聖歌集の中に、顕現節の歌があります。顕現とは、はっきりと姿を現すことや、具体的な形をもって現れることを意味します。特に、神さまや霊的な存在がこの世に姿を見せる際に用いられます。
・「ハレルヤ歌えよ　喜びのうた　ハレルヤみ神の　みもとに響く　たたえの調べは　絶ゆることなし」という顕現節の聖歌 116 番 1 節では、神さまのみ言葉がわたしたちに与えられた喜びを歌っています。
・イエス様は「神さまのみ言葉」として、人となられ、わたしたちの間に宿られました。それがクリスマスの出来事です。そのみ言葉が氷塊を溶かします。わたしたちの氷のような心も溶かしてくださるのです。

（12 月　4 日）「詩編 136：17～26」
低くされたわたしたちを　御心に留めた方に感謝せよ。慈しみはとこしえに。
（詩編 136 編 23 節）

・詩編 136 編には 1 節から 26 節まで、「慈しみはとこしえに」という繰り返しがあります。「慈しみ」という言葉を聞くと、「いつくしみ深き　友なるイエスは」（聖歌 482 番）を思い出す人も多いでしょう。
・この詩の作者スクライヴェンは、結婚を約束した女性が亡くなってしまうという悲劇を二度も経験しました。しかしその失意の中、離れて暮らす母親に、「イエス様は友としてあなたを慈しんでくださる」と手紙を書いたのです。
・その詩が、世界中で愛される賛美歌の一つとなりました。自分たちが低くされ、弱くされたときにこそ、神さまはわたしたちをみ心に留めてくださいます。その慈しみにわたしたちも気づかされ、感謝していきましょう。

（12 月　5 日）「詩編 137 編」
わたしの舌は上顎にはり付くがよい　もしも、あなたを思わぬときがあるなら　もしも、エルサレムを　わたしの最大の喜びとしないなら。
（詩編 137 編 6 節）

・「バビロンでのシオンの思い出」：共同体の嘆きの歌です。紀元前 597 年に始まったいわゆる「バビロン捕囚」は、イスラエルの人たちにとって屈辱的な出来事でした。心の拠り所だったエルサレム神殿も破壊されました。
・そして異邦人が住むバビロニアに連れていかれ、そこに住まわされました。この詩はバビロニアから帰還したものの、再建されないエルサレムを嘆き、歌ったものです。特定の時と場所、出来事に言及した詩編は、他にはあまり見られないものです。
・作者はバビロニアで受けた、「歌って聞かせよ、シオンの歌を」という嘲りを忘れることができませんでした。彼らにとって神殿での歌は、神さまにささげる大切なものでした。だからこそ、それをあざ笑う人々を許すことができなかったようです。

（12 月　6 日）「詩編 138 編」

わたしが苦難の中を歩いているときにも　敵の怒りに遭っているときにも わたしに命を得させてください。御手を遣わし、右の御手でお救いください。

（詩編 138 編 7 節）

・「心からの感謝」：個人の感謝の歌です。この詩編は、大きな悩みから救われたことに対する感謝が歌われています。旧約聖書のレビ記では、神さまに感謝を伝えるときには犠牲をささげるように定められていました。

・しかしここで作者は、「心を尽くして感謝し、神の御前でほめ歌をうたいます」と賛美をするのです。わたしたちは礼拝で賛美をささげますが、その根拠がここにあると言えるでしょう。

・そして 7～8 節では、神さまの「み手」の働きを求めます。聖歌 325 番に「み手の中で　すべては変わる賛美に　わがゆく道を導きたまえ　あなたのみ手の中で」という歌があります。神さまの温かいみ手に包まれて、感謝の賛美をささげましょう。

（12 月　7 日）「詩編 139：1～6」

わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに　主よ、あなたはすべてを知っておられる。　（詩編 139 編 4 節）

・「常に人と共におられる主」：救いを求める個人的嘆願です。わたしたちは生きている中で神さまを捜し求め、神さまに出会い、神さまを受け入れます。そしてそれらのことは、自分の力でやれていると思いがちです。

・しかしこの 139 編では、神さまの方がまず人間を捜し求めておられるのだと言います。そして人の考えることやおこなうことを、神さまは何でもご存じであると言うのです。さらに座る、立つ、歩く、伏すということすらも知っていると書きます。

・聖歌 350 番に「すみわたる大空に　星影はひかり」という歌があります。神さまが創造されたものを大切にされていることを賛美する歌です。3 節後半のこの歌詞を心に留めましょう。「数知れぬ世の子らを　神さまはみな愛し ひとりずつ目をとめて　守られるいつも」。

（12 月 24 日）「詩編 146：5～10」

主は寄留の民を守り　みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる。

（詩編 146 編 9 節）

・今日はクリスマスイブです。今日の詩編には、イエス様のおこないを思い起こす内容が出てきます。「虐げられている人」、「飢えている人」、「捕われ人」、「見えない人」、うずくまっている人」のところに主は来られるのです。

・イエス様はルカによる福音書 4 章 18～19 節で語られました。「主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」と。

・そのような人たちの元に来てくださるということは、あなたが一番つらく苦しい時にイエス様は共にいてくださるということです。その神さまの恵みに、心から感謝したいと思います。

（12 月 25 日）「詩編 147：1～9」

ハレルヤ。わたしたちの神をほめ歌うのはいかに喜ばしく　神への賛美はいかに美しく快いことか。　（詩編 147 編 1 節）

・「イスラエルを顧みられる全能の主」：ハレルヤ詩編です。クリスマス、おめでとうございます。クリスマスの期間、街中や教会はイルミネーションで飾られます。人工的な光ではありますが、それを見るときにわたしたちの心は温かくなります。

・聖歌 350 番は、神さまの大いなる働きを賛美する歌です。「すみわたる大空に　星影はひかり　風そよぐ野に山に　草花はかおる　数知れぬ空の星　神さまはみなかぞえ　ひとつずつ目をとめて　守られるいつも」。

・この 1 節後半の歌詞は、今日の詩編 147 編 4 節が元になっています。星の数を数えるという表現は、アブラハムに「あなたの子孫はそのようになる」と言われた言葉を思い起こします。神さまはすべてをご存じで、守られるのです。

（12 月 22 日）「詩編 145：17～21」
主を呼ぶ人すべてに近くいまし　まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし
（詩編 145 編 18 節）

・この詩編には、賛美の言葉が散りばめられています。表題にもあった通りこの詩編は、ヘブライ語のアルファベットをそれぞれの節の頭文字にし、いろは歌のように言葉を連ねています。
・その中で 18 節では、「近くにいまし」と二度書きます。神さまのような存在には、遠くから見守っておいてほしい。必要なときには近くにいてほしいけど、都合の悪い時にはそばにいないでほしい。そう思ってはいませんか。
・神さまはわたしたちが歩めるように、イエス様を遣わされました。歩みが遅くなればその手を支え、転んでしまったら起き上がらせ、歩くことができなくなったら背負ってくださいます。わたしたちを厳しく監視するために、来られたのではないのです。

（12 月 23 日）「詩編 146：1～4」
霊が人間を去れば　人間は自分の属する土に帰り　その日、彼の思いも滅びる。
（詩編 146 編 4 節）

・「主は助けの神」：ハレルヤ詩編です。ここから最後の 150 編まで、5 つの詩編はすべてハレルヤ詩編となります。どの詩もハレルヤで始まり、ハレルヤで終わるという特徴をもっています。
・賛美は一義的には、神さまに向けてささげられます。神さまの栄光をほめたたえ、神さまに感謝を伝えるのです。そして賛美は、自分の魂に向けてもおこなわれます。神さまに寄り頼むしかない自分の姿を思い起こすのです。
・146 編～150 編の 5 つの詩編は、ユダヤ人の朝の祈りでも用いられていたそうです。朝、行動を起こす前にまず、神さまを賛美する。そのような毎日を送ることができれば、心も軽くなるのかもしれません。

（12 月　8 日）「詩編 139：7～12」
闇もあなたに比べれば闇とは言えない。夜も昼も共に光を放ち　闇も、光も、変わるところがない。
（詩編 139 編 12 節）

・作者は続けて、どこにいても神さまが共におられると書きます。7 節を読むと、どうしても神さまから逃げることのできないというネガティブな表現にも見えます。しかし後半にいくにつれ、神さまがいつも自分をとらえてくださるという喜びがあふれていきます。
・聖歌 487 番は、希望の歌です。「重荷背負う人に　安らぎ与える主よ　あなたは闇に光を放ち　その荷を共に担われる」。この歌詞にあるように、わたしたちが闇にうずくまっているときにも光を与え、導いてくださるのです。
・今、教会は降臨節です。紫の祭色の下、お花も飾られない礼拝堂には、どこか寂しさを感じます。しかしわたしたちは知っています。夜は必ず明けて朝が来ることを。闇には光が与えられることを。神さまはそのように、わたしたちを守ってくださいます。

（12 月　9 日）「詩編 139：13～18」
胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている　まだその一日も造られないうちから。
（詩編 139 編 16 節）

・作者はさらに、自分が存在し始めた時点から神さまが共にいたと書きます。お母さんのお腹の中にいたときから神さまが関わっておられたと考えると、何だが不思議な思いを持ってしまいます。
・16 節に「わたしの日々はあなたの書にすべて記されている」とありますが、一体どのようなことが書かれているのでしょう。誇らしく「どうぞご覧ください！」と言えるページは少ないのではないでしょうか。
・神さまは、わたしたちのすべてをご存じです。欠けた所や醜い部分も、全部わかっておられます。それにもかかわらず、わたしたちに関わり続けてくださる。そこに作者は恐れと驚きを感じずにはおられなかったのです。

（12 月 10 日）「詩編 139：19～24」
神よ、わたしを究め　わたしの心を知ってください。わたしを試し、悩みを知ってください。
（詩編 139 編 23 節）

・この詩編 139 編では、神さまがいつも共にいてくださることを語り続けていました。しかし今日の箇所になって突然、逆らう者や憎む物に対する激しい感情をぶつけます。「逆らう者を打ち滅ぼしてください」と語るのです。
・この言葉に違和感を覚えるかもしれませんが、作者がここで本当に願っているのは 23～24 節に書かれていることです。すなわち悪に対して、自分も同じように過ちを犯していないかということです。
・わたしたちは自分に敵対する（あるいは意見が異なる）相手を見つけたときに、ときに攻撃的になります。その姿を、いつも共におられる神さまはどう見ておられるのか。そのことを少し、想像してみてはいかがでしょうか。

（12 月 11 日）「詩編 140：1～8」
主よ、わたしの神よ、救いの力よ　わたしが武器を執る日　先頭に立ってわたしを守ってください。
（詩編 140 編 8 節）

・「悪人の自業自得を求める祈り」: 救いを求める個人の祈りです。この一年、詩編を丁寧に読んできました。23 編のように神さまとの関係を歌ったものや、100 編のように喜びと感謝を表明するものなど、心が豊かになる詩編が多くありました。
・一方で、「敵」や「悪」を何とかしてほしい（滅ぼしてほしい）という「嘆願」も多くみられます。そのような詩編が出てくるたびに、どのように解説をしたらよいのだろうか、大変悩んだのも事実です。
・今日の箇所には、「わたしが武器を執る日」とあります。何があっても武器は執るべきではない、とわたしたちは考えます。しかしそうせざるを得なかった人たちが当時いたことを、そして今も世界にはそのような人たちがいることを、知るべきなのかもしれません。

（12 月 20 日）「詩編 145：1～9」
主はすべてのものに恵みを与え　造られたすべてのものを憐れんでくださいます。
（詩編 145 編 9 節）

・「主の偉大さと慈しみ」: この詩から「賛美的歌集」が始まります。またこの詩はアルファベットによる詩、いわゆる「いろは歌」の最後のものです。この詩編では全体にわたり、神さまを賛美していきます。
・1 節に「あがめ」という言葉があります。その意味は、「非常に尊いものとして敬い、大切に扱うこと」だそうです。神さまを大切に思い、何よりも大切にするということなのでしょう。
・ほかの宗教では、供え物をしたり祭壇をつくって祀ったりするなど、目に見える形で大切にすることもあります。ではわたしたちは神さまを、どのようにあがめたらよいのでしょうか。いつも祈りの中で神さまに感謝すること、それが大切なのかもしれません。

（12 月 21 日）「詩編 145：10～16」
主は倒れようとする人をひとりひとり支え　うずくまっている人を起こしてくださいます。
（詩編 145 編 14 節）

・今日の箇所には、「主権」という言葉が 4 回登場します。主権は一般的に、国家がその領土と国民を統治し他国の干渉を受けずに政治を最終的に決定する最高の権力を指します。この概念は、国家の構成要素として非常に重要だそうです。
・では聖書の「主権」、どのようなことなのでしょうか。国家を「神の国」と置き換えてみましょう。神の国が世界とわたしたちを統治し、神さまの思いを伝えるために、神さまが決定すること、となるのです。
・その決定とは、イエス様をわたしたちのために遣わすということです。倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまっている人を起こすために、イエス様が来られたということ。まもなくクリスマスを迎えるこの時期に改めて感謝しましょう。

（12 月 18 日）「詩編 144：1～8」

高い天から御手を遣わしてわたしを解き放ち　大水から、異邦人の手から助け出してください。

（詩編 144 編 7 節）

・「王の勝利、民の幸福」：王の詩編です。王の詩編とは、ダビデのような王に関係する祝祭で用いるために作られたと考えられているものです。「ダビデの詩」と書かれていますが、ダビデが直接書いたものではないというのが一般的な考え方です。
・この詩をサムエル記上 17 章に書かれている「ダビデとゴリアト」の物語に重ねることもあります。ペリシテ人のゴリアトは巨人で、イスラエルの人たちに一対一での戦いを挑んでいました。
・当時ダビデは羊飼いであり体も小さかったのですが、投石によりゴリアトを倒します。その時にダビデは、「この戦いは主のものだ」と語ります。神さまにより頼み、敵を退けたのです。

（12 月 19 日）「詩編 144：9～15」

わたしを解き放ち　異邦人の手から助け出してください。彼らの口はむなしいことを語り　彼らの右の手は欺きを行う右の手です。

（詩編 144 編 11 節）

・聖歌 431 番に、「新しいエルサレムは」という歌があります。エルサレムと聞くと争いのイメージが強く、喜びや平和とは程遠いようにも感じます。しかし聖書の描く「新しいエルサレム」とは、地理上の場所とは異なるのです。
・その 3 節に、このようにあります。「愛しきみ国を仰ぎ　生かされる　この身をささげ　心からほめたたえよ　父と子と聖霊の主を」。詩編を読んでいていつも心に留めたいのは、神さまは特定の民族や国のものではないということです。
・「異邦人」という言葉に反応して排他的になるのではなく、そのような思いを改めさせるためにイエス様が来られた事実を覚えていきましょう。神さまの本当の思いを受け取ることができればと思います。

（12 月 12 日）「詩編 140：9～14」

わたしは知っています　主は必ず、貧しい人の訴えを取り上げ　乏しい人のために裁きをしてくださることを。

（詩編 140 編 13 節）

・詩編 140 編の作者とされるダビデは、イスラエル最大の王として人々の記憶に残っています。そのダビデは先代の王サウルから命を狙われたり、息子アブサロムに反乱を起こされたりと、とても困難な状況を経験してきました。
・その中で彼は、神さまに救いを求めていきます。その言葉が伝えられ、詩編の中に入れられたのでしょう。しかしサムエル記を読むと、ダビデは決して「罪のない潔白な」王ではないことがわかります。
・わたしたちも自分の悪いところは棚に上げ、人を非難し、その人に災いが起こるように願ってしまうこともあるかも知れません。神さまはきっと、わたしたちのそのような心も含めて、すべてご存じなのです。

（12 月 13 日）「詩編 141：1～4」

わたしの祈りを御前に立ち昇る香りとし　高く上げた手を　夕べの供え物としてお受けください。

（詩編 141 編 2 節）

・「悪の誘(いざな)いに逆らう祈り」：救いを求める個人の祈りです。2 節で作者は、祈りを犠牲として受け取ってほしいと願います。旧約聖書の中では、様々な場面で献げるべきいけにえが定められていました。
・しかし旧約聖書ホセア書 6 章 6 節にはこうあります。「わたしが喜ぶのは愛であっていけにえではなく　神を知ることであって　焼き尽くす献げ物ではない」。この言葉をイエス様はご自分の口で、群衆に語られました。
・わたしたちは祈りによって、神さまから受けた愛に感謝し、周りの人たちと愛のうちに歩むことを求められています。何かを犠牲にしたり、他人に犠牲を強要したりする必要はないのです。

（12 月　14 日）「詩編 141：5～10」
主よ、わたしの神よ、わたしの目をあなたに向け　あなたを避けどころとします。わたしの魂をうつろにしないでください。　（詩編 141 編 8 節）

・「主をさけどころとする」というのは、どういうことでしょうか。旧約の中でのイメージは、神さまが守られている城壁の中に自らを置くという感じかもしれません。しかしそこに行くためには、「正しい者」にならないといけなかったのです。
・しかし聖書に「正しいものはいない、一人もいない」と書かれているように、思いと言葉とおこないによって全く罪を犯さない人などいません。このままでは誰一人救われない、だからイエス様が必要なのです。
・イエス様が十字架上で広げられた両手は、前から飛んでくる石や槍などをすべて受け止めてくれます。本当であれば罪あるわたしたちに向かってくるそれらの物を、イエス様は身をもって防いでくださるのです。イエス様こそが、わたしたちのさけどころです。

（12 月　15 日）「詩編 142 編」
わたしの叫びに耳を傾けてください。わたしは甚だしく卑しめられています。迫害する者から助け出してください。彼らはわたしよりも強いのです。
（詩編 142 編 7 節）

・「獄舎で悩む人の祈り」：救いを求める個人の祈りです。この詩の表題に、「ダビデが洞窟にいたとき」とあります。ダビデはガトから逃れて洞窟を見つけ、そこに隠れます。神さま以外には助けてくれる者が誰もいない状況でした。
・サムエル記上 22 章 1 節には「アドラムの洞窟」の話が、またサムエル記上 24 章 3～4 節には「エン・ゲディの洞窟」の話が載せられています。どのような状況でダビデは、友に見捨てられ、敵に取り囲まれた状況になったのでしょう。
・来年の「日ごとの聖書」では、ヨシュア記・士師記・ルツ記・サムエル記上・下を読んでいきます。その中に、ダビデの物語も出てきます。どのようなことがあって彼は神さまに救いを求めたのか、読むのが楽しみですね。

（12 月　16 日）「詩編 143：1～6」
あなたの僕を裁きにかけないでください。御前に正しいと認められる者は命あるものの中にはいません。　（詩編 143 編 2 節）

・「悔い改める者の祈願」：救いを求める個人の祈りです。この詩編は 7 つある「悔い改めの詩編」の 7 つ目のものです。この詩編には、他にはあまり見られない記述があります。2 節の「御前に正しいと認められる者は　命あるものの中にはいません」です。
・詩編の中で多いのは、「わたしの正しさによって」という言葉です。「自分は正しいのだから悪を何とかしてください」という願いが、一般的なのです。しかしここでは、正しくない自分を認め、神さまの憐れみを求めていくのです。
・神さまに頼る、そのことを歌った聖歌 495 番があります。「イェスよわが神よ　主よわがすべてよ　祈りにこたえて　み恵みをたまえ　主はわが喜びいよよ主を愛せん」。罪人であるわたしたちの祈りに耳を傾けてくださる神さまに、すべてを任せましょう。

（12 月　17 日）「詩編 143：7～12」
御旨を行うすべを教えてください。あなたはわたしの神。恵み深いあなたの霊によって　安らかな地に導いてください。　（詩編 143 編 10 節）

・昨日も書いた通り、この詩編の作者は「正しいと認められる者は命あるものの中にはいません」と言います。「正しさのゆえに」と自分の正当性を誇張する人が多い中で、とても特徴的なものです。
・この思いは、わたしたちも大切にしたいものです。神さまは、わたしたちが特別に良いおこないをしたから恵みを与えてくださるのではありません。ただただ一方的に、愛を注いでくださるのです。
・その喜びを、「夕日落ちて　夜はおとずれ（聖歌 37 番）」の 4 節ではこう歌います。「感謝します　恵みの日を　わが旅路の　平和な日を　神の愛に　生かれる　新たな日を　祈ります」。この思いをいつも胸に、眠りにつきたいものですね。